大道芸人たち
Artistas callejeros
CHAPTER 4

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2012 Yu Yaotome

目次

バルセロナ、チェス
バレンシア、太陽熱
サン・マリ・ド・ラ・メール、異変
ディーニュ・レ・バン、別れ
ニース、再会
アヴィニヨン、乾杯

バルセロナ、チェス

思い思いに過ごす定休日に、ヴィルはボーランの『フルートとジャズ・ピアノ・トリオのための組曲』を練習していた。レパートリーにボーランのジャズを取り入れたいと言い出したのは稔だった。『ギターとジャズ・ピアノ・トリオのための協奏曲』を演奏してみたかったのだ。『ヒスパニックダンス』『ボルサリーノのテーマ』などボーランつながりで弾ける曲はいろいろあるし、レストランやバーにも合う。フルートのための曲も多く、『ピクニック組曲』はピアノとギターとフルートの三重奏ができる。手品にもテンポが合う。それで、三人は順次レパートリーを増やしていた。

稔がバロセロナの街から戻ると、食堂でレネが頭を抱えてイネスとひそひそと話していた。

「何があったんだ？」

稔が訊くと、レネは上の部屋を目で示した。

「またかよ」

稔はため息をついた。蝶子がカルロスの部屋に消えたのだ。二人はしばらく出てこない。そうするとヴィルはたいていピアノを弾く。耳聡い稔だけでなくレネまでが怯えるような音を出す。ショパンやリストやスクリャービンを弾いている時もある。今日はボーランだった。

日本で二人の関係が少し改善されたかと思っていたのに、バルセロナに戻ってきたら元の木阿弥だった。というよりは、ひどくなっていた。蝶子はカルロスにべったりだった。ヴィルはそれを仕方ないことと流すこともできなければ、以前のように無表情に逃げ込むこともできなくなっていた。確かに顔には大して表れていないのだが、広間に置かれたピアノにその矛先が向いてしまっていた。

二階から蝶子が降りてきた。手にはフルートを持っている。何もなかったかのように平然と歩く蝶子が広間に行く前に、稔はその手首を強引に引っ張って、食堂に連れ込んだ。

「何よ」

「お前さ。少しは考えろよ」

蝶子は切れ長の目をさらに細めて、じろりと稔を見た。

「何を」

「重要書類でデータの上書きはしないのがお前の主義だったんじゃないのか？」

蝶子は馬鹿にしたように言った。

「データの上書きなんか、とっくの昔に終わっているのよ」

「じゃ、お前が今やっているのはなんなんだよ」

蝶子は鼻で笑った。

「今やっていること？ビショップにとられないように、クイーンはキングの側に駒を戻したのよ」

また新しいたとえ話かよ。稔はむすっとして乗らなかった。稔がかなり腹を立てているようなので、蝶子ははぐらかすのをやめた。

「私、ティーンエイジャーじゃないの。自分のやっていることぐらいちゃんとわかっているわよ」

稔は腰に手を当てて仁王立ちになって言った。

「わかっているって？　あの音が聴こえないのか？」

蝶子は勝ち誇ったように言い放った。

「聴こえてるわよ。私、耳は悪くないの」

そういって、稔を押しのけて広間へと入って行くと、頼まれもしないの

に勝手に『Veloce』にフルートを合わせだした。ヴィルはテンポをあげた。蝶子はついていった。凄みのある演奏だった。文句のつけようがなかった。二人は止まっては意見を交わし合いながら曲を仕上げていった。稔もレネも、後から降りてきたカルロスも全く入り込む余地がなかった。

私の耳は悪くない。蝶子は心の中で繰り返した。わかっている。こんな音を出されたら誰だって氣づく。もしかしたら真耶のことを好きになったんじゃないかって思っていたけれど、そうじゃない。蝶子は、想いを寄せられることには慣れていた。学生時代から、そんなことはいくらでもあった。中学生の頃、上級生につきあってほしいと懇願され、三ヶ月近く毎日帰宅路で待ち伏せをされたことがある。大学時代にも結城拓人だけでなく多くの男に言い寄られた。ミュンヘンでもエッシェンドルフ教授と一緒に住んでいるにもかかわらず、熱烈に言い寄ってくる男達が何人もいた。蝶子にとってその男達は、迷惑であったり、誇らしい勲章であったりはしたが、それ以上の存在ではなかった。

コルシカフェリー以来、数週間にわたってレネに熱っぽい目で見られた時にも、蝶子はおもしろがる以上の感情を持てなかった。そのかわり、レネがその後、他の女性にぼうっとなっていても、残念だとは思わなかった。大切な仲間、親友としてのレネは蝶子からは失われなかったからだ。それはカルロスに対しても同じだった。

けれど、ヴィルだけは別だった。シベリアの吹雪のような冷たくシニカルな言葉を遣う無表情な青年が、ヴェローナのバーで突然奏でだした音色が既に大きな奇襲だった。稔と一緒に奏でる音楽は愉快で楽しかった。けれど、ヴィルとの競演はそれ以上だった。それは響き合う魂の調べだった。蝶子が一度も出会ったことのない芸術の恍惚そのものだった。真耶にとっての結城拓人のような存在を蝶子はそれまで持たなかった。フルートと音楽への愛は常に孤独の中にあった。

「彼とともに奏でる音楽は私の聖域なの」

真耶が拓人についていった言葉は、そのまま蝶子にとってのヴィルの存在そのものだった。たった一人で音楽のために戦ってきた蝶子の底なしの孤独から、自分を憎んでいるような言葉遣いをする冷たい男が軽々と救い出した。その音色が、いつの間にか変わっていった。誰でも氣づくほどの強い想いがその音色にあふれるようになり、それは当の蝶子を誰よりも強く揺らした。

けれど、ヴィルはそれ以上の領域侵犯を長いことしなかった。親しい仲間として以上の関係を求めてくることはなかった。蝶子が示唆するまでもなく、ルールをストイックに守り続けた。

それが浅草で破れた。蝶子の最大のウィークポイントをヴィルは理解していた。たぶん、稔やレネには生涯理解してもらえないであろう孤独を、ヴィルはたぶん本能でもしくは経験で知っている。何でも話し相談するカルロスに、何万の言葉を遣ってでもわかってもらえない暗闇を、ヴィルだけは何一つ語る必要なく包み込むことができる。そして蝶子はそれを必要としていた自分自身に驚いていた。それは由々しき事態だった。

蝶子はヴィルが稔やレネ以上の存在になってしまっていることを認めつつも、必死で抵抗していた。Artistas callejerosは、蝶子にとって最初にして唯一の居場所だった。そして、Artistas callejerosは蝶子だけではなくて、稔やレネやヴィル本人にとっても大切な場所だった。壊すわけにはいかない。彼が領域侵犯を試みるなら、自分が領域を変えなくてはならない。それがいつまで可能なのか、蝶子にはわからなかった。

バレンシア、太陽熱

ゲルマン人でもこんな風にダンスが踊れんだな。稔は感心した。ドイツ人と日本人ってのは同じような朴念仁民族だと思っていたが、やはりヨーロッパの人種ってのはちょっとは違うらしい。こんなトカゲ女のどこがいいのかさっぱりわからないが、テデスコの本氣度は日に日に強まっている。

さっきまで、ティントとチョリソーとでばか騒ぎをしていたはずなのに、どうしてこうなったんだろう。俺がギターを持ったのが間違いの元だったのかもしれない。いや、ブラン・ベックなんかにリクエストをきくんじゃなかった。ピアソラの『ブエノスアイレスの夏』などといわれたので、稔は頭を抱えた。ここにはギョロ目もいないし、どうすんだ、こんなラテンの世界を展開して。

だが、ヴィルは稔とまったく逆の反応を見せた。これ以上ないというくらい真面目な顔のまま、黙って蝶子の手を取ると、居間の中央に連れて行った。百戦錬磨のトカゲ女はこの程度ではビビりはしない。タンゴの腕前もカルロスの館で証明済みだ。だが、レネも稔もまさかヴィルがアルゼンチン・タンゴを踊れるとは思ってもみなかった。金髪のドイツ人と生粋の日本人のダンスにしてはやたらと決まっている。これほど官能的な踊りをこの二人がするとはね。苦しい恋ってのは偉大ってわけだ。考えてみると、タンゴほど蝶子に合っているダンスは考えつかなかった。それにヴィルの恐ろしいばかりの情念も今回ばかりはぴったりだ。この家には「らしさ」がある。舞台としては申し分ない。ギターじゃなくてバンドネオンだったら完璧だ。もっとも、これだけみんな酔っぱらっていれば、完璧さなんかどうでもいいんだが。曲が終わると、稔はかって に手酌をして、目を二人から離さずにティントを飲んだ。お蝶もテデスコをおちょくるのはそろそろ考えた方がいい。このままだと早かれ遅かれ Artistas callejeros には亀裂が入る。

バレンシアの海岸から十分ほどのところにあるこの家を貸してくれたのは、バルセロナのモンテス氏だった。レストランで四人が仕事をする時には、カルロスが住居と食事代を負担してくれると言ったので、それならバレンシアに行く時は自分の別荘を提供しようと申し出てくれたのだ。

ヴィルは日本から戻って以来、蝶子と話す機会を待っていたが、それは簡単なことではなかった。日本ではあれほど近く感じられたのに、戻ってきてからの蝶子は全く別人のようだった。側に寄ることすらも難しかった。必要以上にカルロスと親密にし、ヴィルを避けているようにも思えた。たぶんその通りなのだろう、そうヴィルは思った。だが、自分は愛の告白をしようとしているのではない、ただ、自分が誰なのかを言おうとしているだけだ。まずそこから始めなければならなかった。そうでなければ蝶子に対してフェアではなかった。

ようやくバルセロナとカルロスから離れて、四人だけになったので、ヴィルはもうこれ以上待つつもりはなかった。レネのリクエストを、稔が奏で始めた時に、ヴィルは自然に蝶子を踊りに誘っていた。たぶん氣がついたに違いない。アルゼンチン・タンゴの名手である父親に仕込まれたあのステップには、彼女なら覚えがあるだろう。

アーチ状になった支柱を通して、月の光がレンガ色のテラスに差し込んでいる。先ほどまでの騒ぎが嘘のように、静まり返った居間には誰も

いない。ピアノの上まで月の光が差し込むと、そこに蝶子のフルートが置かれているのがわかる。蝶子はティントを飲み過ぎたのかもしれない。普段はそんな所に大切な楽器を置きっぱなしにしたりしないのに。

冷たいレンガの音を響かせて、ヴィルがピアノに近寄ってきた。ピアノに手をかけてしばらく佇んでいた。それからフルートの箱に手を伸ばし、中から楽器を取り出す。慣れた手つきでフルートを組み立てると、しばし躊躇していたがやがて、口づけをするようにフルートに唇を当てると、静かに月に向かって奏でだした。

寝ぼけながら、レネは蝶子がフルートを吹いているのだと思った。稔も、目を覚まして、お蝶め、何時だと思っているんだ、ついに乱心したか、とつぶやいたがすぐに氣がついた。その『亡き王女のためのパヴァーヌ』は蝶子のいつもの音色とは違っていた。まったく違っていた。

蝶子は、フルートの音色を聴いて、すぐに起き上がり、ナイトドレスの上にカーディガンを羽織り、居間に入っていった。そして黙って月明りの中で無心にフルートを吹くヴィルの背中を冷淡にじっと見つめていた。

アウグスブルグ。年齢。ピアノの腕前。タンゴのステップ。そしてWの頭文字。だいぶ前にわかっているべきだったわ。そうだったとしても、認めなかったでしょうね。騙されていたなんて思いたくなかった。だけど、この音を聴いてわからないと思うほど馬鹿だとは思っていないでしょうね。

やがてヴィルは最後の繰り返しを演奏せずに、フルートから口を離した。居間の入り口に蝶子が立っているのはわかっていたが、黙って振り向かずに月を見ていた。しびれを切らしたのは蝶子だった。

「なるほどね。アーデルベルト・ヴィルフリード・フォン・エッシェンドルフ。ハインリヒのご自慢の跡継ぎ息子。こんなに長い間、よくも騙し通したものね」

「騙したりしていない。本当は隠したくもなかった」

振り向いたヴィルの目はいつもの通り青く真っ直ぐだった。

階段の上で隠れてこそこそと様子を伺うレネと稔は、二人のドイツ語のやり取りに全くついていっていなかったが、蝶子が謎に満ちたテデスコの正体を突き止めたことだけはなんとなくわかった。

「フルートが吹けるとはひと言も言わなかった。私の名前を聞いても何も言わなかった。出雲で自分の名前が出ても。よくそんな台詞が吐けるわね。そんなに私が憎い？」

「憎んでなんかいない」

「私の存在とお母様の自殺は無関係じゃないわ」

「あんたがおふくろを手にかけたわけじゃない。おふくろは勝手に夢見ていた立場が手に入らない事実を受け入れられなかっただけだ。それに親父が生徒に手を出したのは、あんたが初めてじゃない。いちいち憎んでいたら、こっちの体が持たない」

「だったら、どうして今まで黙っていたの」

「最初は、単純に知りたかったんだ。親父にとってあんたは遊びじゃなかった。あの親父があんたのどこにそれほど夢中になったのか。それに、なぜあんたが姿を消したのかもね」

ヴィルは、いまや蝶子を父親以上によく理解していたし、ミュンヘン

を去った理由も蝶子の口から直接聞いていた。
「最初はってことは、今では違うわけね。答えて。今まで黙っていたのにどうして急に正体を明かす氣になったわけ」
氷のように冷たい蝶子の視線をヴィルは真っ直ぐに見返した。少し間があり、会話がわかっていないレネと稔までが手に汗を握って答えを待った。ヴィルは蝶子の方に大股で歩み寄り、すれ違い様にフルートを蝶子に渡した。そしてささやくように言った。
「あんたはとっくにその答えを知っているはずだ」
階段を上がり、こそこそと隠れようとするレネと稔を一瞥しただけで口もきかずにヴィルは自分の寝床にもぐりこんだ。
蝶子は、そのまま眉一つあげずにいたが、やがて、フルートを取り上げると、静かにヴィルの止めた所から『亡き王女のためのパヴァーヌ』を最後まで吹いた。先ほどまで、ドイツ人の唇のあたっていた場所に唇を当てて。

朝食の前に、稔はひとりでドキドキしていた。なにも俺が狼狽えることはないだろう。ブラン・ベックの野郎は狸寝入りを決め込んで、後から出てくるつもりらしい。ずるいやつめ。稔がダイニングに行くと、ヴィルは既にお湯を沸かして、インスタント・コーヒーを淹れていた。
「おはよう」
「おはよう」
代わり映えのしないいつもの朝だった。稔はパンを割ると、軽くトーストをして、オリーブオイルと塩と完熟生トマトをつぶしたものを載せた。ヴィルの方に、つぶしトマトの入ったポットを差し出すと黙って受け取り、同じようにトーストパンに載せて食べた。
「美味いな」
「ああ、美味い」
蝶子が入ってきた。
「おはよう」
「おはよう」
「おはよう」
蝶子は黙ってコーヒーを淹れると、自分もトーストを作り、それから平然とヴィルの隣に座って言った。
「私も、それ食べる」
ヴィルも何事もなかったようにトマトのポットと塩を蝶子に渡した。稔はオリーブオイルを渡してやった。なんだ、心配した俺がバカみたいじゃないか。稔は腹の中で毒づいた。

「マリポーザ！　ようやく追いついた」
カテドラルの前で一稼ぎをしていると、聞き覚えのある声がした。
「ギョロ目か。また来たのかよ」
稔は呆れて叫んだ。神出鬼没にもほどがある。もっと仕事しろよ！
「カルちゃん！　ちょうどそろそろおいしいシェリーが飲みたいと思っていた所なのよ。バレンシアで一番のバルってどこかしら？」
稔は白い目で蝶子を見た。昨日の今日、テデスコの真ん前でお前はギョロ目に媚を売るのか。デリカシーってもんはないのか、デリカシーってもんは。

「何よ。ヤスだって最高のイベリコを食べたいでしょ。来週はもうスペインにはいないんだし」
「そんな！　マリポーザ。バルセロナの私の館には来てくれないんですか？」
「多数決で、Artistas callejeros は来週からフランスで稼ぐことになったのよ。でも、カルちゃんも仕事が一段落したら来れるんでしょう？」
あいかわらず、メシをねだる時の笑顔だけは最高なんだから。稔は呆れて天を見上げた。レネはいつも通り悔しそうにしていたし、ヴィルもいつも通り眉一つ動かさずにいた。だが、その目の光は以前よりも強くなっていた。ゲルマン人って、本当に損な人種だな。ギョロ目の半分でも積極的に誘えば、ブラン・ベックよりはるかに脈ありそうなのに。
　稔はだまってベベベンとバチを当てた。バレンシアってのはいい街だ。太陽が溢れると人は開放的になる。財布の紐も緩むらしい。ギョロ目がおごってくれるなら、思いっきり美味いものが食えて飲みまくれるってわけだ。結構。

サン・マリ・ド・ラ・メール、異変

　海岸には、痛くなるほどの陽光が溢れていた。そろそろ夏も終わりだった。それでも最後の輝きで夏とは楽しむためのものだと教えてくれる。遅めのヴァカンスを楽しむ人たちで、サン・マリ・ド・ラ・メールの海岸はいっぱいだった。四人は一稼ぎを終えて、いつもより実入りが良かったので、海の見えるレストランで食事をした。ブイヤ・ベースの皿が片付けられて、極上のアリオリ・ソースに未練たっぷりの一瞥をした後、稔は不意に日本語で言った。
「おい、一般論だけどさ」
蝶子は片眉を上げた。またかという表情だった。詮索好きな男ね。
「何よ」
「ある男が、とある女に本氣で惚れているとしてさ」
その話ね、と蝶子はうんざりした顔をした。どうりでブラン・ベックもテデスコもいるのに、ルールを破って日本語で『一般論』をはじめたわけね。
「その男にはけっこうな勝算があると、外野からは見えるのに、まったく手を出さない場合、それって国民性なのかな？それとも女が絶対に断るという確信があるからかな？」
「そんなの、人それぞれでしょ。一般論でくくれると思っているの？」
「だから、お前は、どう思う？」
　蝶子はため息をついた。けれど、結局はいつかは説明してやらねばならないことだった。なんといっても Artistas callejeros は運命共同体なのだ。このまま、二人に黙っているわけにはいかない。ブラン・

ベックには折を見てヤスが上手に説明するだろう。この複雑な状況を。
「あくまで一般論だけど」
蝶子はわざとらしく付け加えた。稔にとってはこの辺の枕詞はどうでもよかったが、トカゲ女にしゃべらせるにはこれが一番手っ取り早い。
「民族性とか、相手の反応ってこともあるわ。けれど、たいていはもっと個人的な事情が絡んでいるんじゃないかしら」
「例えば？」
「例えば、その女が父親の元愛人だったとか、それが原因で母親が自殺したとか」
稔は呆然と蝶子を見た。蝶子は平然としていた。たぶん、ブラン・ベックにはこの話の要旨はまったく想像できないであろう。だが、テデスコは？　稔にはヴィルが理解しているとしか思えなかった。蝶子は英語で他の二人に言った。
「あたし、デザート食べたくなっちゃった。頼んでもいい？」
まるで、いままで稔とデザートについて日本語で会話をしていたかのように。
　蝶子はムース・オ・ショコラを、レネはクレーム・ブリュレを頼んだ。稔とヴィルはコーヒーだけを注文した。
　稔はまだ先ほどの衝撃から立ち直っていなかった。お蝶、お前はすごい女だぜ。そこにいるのが例の教授の息子だとわかってて、あのバレンシアの晩以来、どうやっていつも通り普通に接する事が出来たんだ？どうやってムース・オ・ショコラなんて頼めるんだ。
嬉々としてスプーンを口に運ぶレネとは対照的に、蝶子は「そんなに嫌ならなぜ頼んだ」といいたくなるような食べ方をしていた。氣が遠くなるほど甘い上に、量もハンパではなかったからだ。レネの食べ方は稔には異常に見えた。黙ってムースと格闘していた蝶子は、ふと視線に氣づいて目を上げた。ドイツ人はいつものように強い光を宿らせて真っ直ぐに蝶子を見ていた。蝶子は婉然と微笑んで、スプーンとデザートグラスをヴィルに渡した。黙って受け取ると、ヴィルは殺人的な甘みの固まりを口に運んだ。女がその手に持ち、いままで口を付けていたスプーンを使って。なんてひどい女だ。稔は心の中で叫んだ。やがて、稔とレネの目の前で、この手の間接キスが何度も行われるようになった。蝶子は同じことを稔やレネにはしなかった。自分の使ったスプーンを黙ってヴィルに渡す。もしくはヴィルの使ったフォークを黙って取り上げる。フルートを吹いていたかと思うと、それをドイツ人に渡し切ない響きを強制する。サディストも大概にしろと稔は憤慨したが、レネは別意見だった。
「パピヨンもテデスコが好きなんですよ」
「どこをどう分析すると、トカゲ女がテデスコに惚れていることになるんだよ」
「テデスコは見つめる以外何もしていないのに、パピヨンは挑発しまくりじゃないですか。あれはテデスコが行動を起こすのを待っているってメッセージですよ」
「あの女がそんなまどろっこしいことするかよ。やりたくなりゃ、襟首つかんでベッドに連れていくだけだろ」
「馬鹿だなあ。それだけパピヨンが本氣ってことじゃないですか。ああ、本当にせつない。なんでよりにもよってテデスコなんだろう」
「さあな。そう簡単には片付かないぞ、この話は」

「なぜ？　テデスコが行動さえ起こせば、今日にも片付くじゃないですか」
「お前さ。父親のもと愛人で、母親の自殺の原因になった女に惚れたらどうする？」
レネは蒼白になった。
「ほら、お前だって簡単に片付かないって思うだろ？」
稔はそういうと口をつぐんだ。

蝶子の前には二人のドイツ人がいた。一人は誰よりも大切な仲間。信頼できる無口な男で、誰よりも蝶子のことを理解している。音楽をともに奏でれば、すべてを忘れることができるほどの芸術の恍惚を味合わせてくれる。そして、もう一人が因縁のアーデルベルトだった。その二人が同一人物だということに、蝶子は二週間経ってもまだ慣れることができなかった。
アーデルベルトの存在を知ったのは、エッシェンドルフの館の楽器置き場で掃除をしていたマリアンと雑談をしたときだった。自分のフルートを箱にしまって置きながら、蝶子はふと、いつもそこに置いてある黒革の箱に手を伸ばした。
「A.W.v.E」と小さく金色で刻印されている。ハインリヒのものではないが、フォン・エッシェンドルフ家のだれかのフルートなのだろう。
「ああ、それはアーデルベルト様のものですよ」
マリアンは掃除を続けながら言った。首を傾げる蝶子をその初老の家政婦は興味深そうに見つめていたが、やがておせっかい心をだし、教授には聴かれないように小声で言った。
「旦那様の息子です。こちらの跡継ぎですよ」
「息子さんがいるの？　知らなかったわ」
「それは当然ですよ。ここ七、八年、一度たりともこちらには足を踏み入れていませんもの」
「まあ」
「フルートがとてもお上手で、大学在学中にコンクールでも優勝なさったんですよ。卒業後に旦那様がデビューの準備を大喜びで進めていらっしゃったんです。でも、どういうわけだか急に、どうしてもフルートをやめるとおっしゃって。旦那様は本当にがっかりなさったようでした」
「今は、どこにいるの？」
「生まれたときから、ずっとアウグスブルグですよ」
「跡継ぎ息子なのに、ここでは暮らしていなかったの？」
「正式の婚姻で生まれた方ではないんですよ。旦那様も、もともとは跡継ぎになさるつもりはなかったようです。でも、あまりにも音楽の才能に秀でていらっしゃるので、途中から教育に夢中になられてね」
蝶子は教授の求婚にイエスと答えたばかりだった。その青年は、私のことをどう思うのだろう。アーデルベルト・W・フォン・エッシェンドルフ。Wはヴァルター、ヴィルヘルム、それとも…？
「どんな人なの？」
「悪い方ではありません。でも、少し変わっていらっしゃいますね」
「どんなふうに？」
「笑ってくださらないんですよ」
ヴィルは確かにほとんど笑わなかった。音楽の才能にも恵まれてい

た。けれど蝶子はヴィルとアーデルベルトが同じ人間だと考えようとしたこともなかった。会ったはじめの頃から、ヴィルは私のことを知っていたのだろう。だから、あんな風にいつもつっかかってきたのだ。ヤスやブラン・ベックへの態度とは大きくかけ離れて、私にだけとても冷たくて身構えていた。私はその理由を考えたことすらなかった。お母様が私のせいで命を絶ったのだ。

蝶子が教授のもとから逃げる決心をした時に、心の中にあって行動を急がせたのはアーデルベルトだった。教授はマルガレーテ・シュトルツの葬式にすら行かなかった。アーデルベルトはたった一人で、お母様を弔ったのだ。どれほど私を恨んでいることだろう。それなのにハインリヒは来週にでもアーデルベルトに会えと言った。食事でもしながらお互いに知り合い、結婚式のことや今後のことを話そうと何事もなかったかのように言った。そんな立場に立たされるアーデルベルトの心の痛みを慮って、蝶子は居ても立ってもいられなかった。同情と慰めの想いを伝えたくても、自分が悲劇の原因では話にならない。

夕暮れに輝く小麦畑のような髪をした男の湖のように青い目がいつもじっとこちらを見つめている。恋をしている優しいテデスコに見える時もあるが、痛みを消化できないでいる冷たいアーデルベルトに見える時もある。そのどちらもを、蝶子は抱き寄せたかった。強い想いで引き寄せられていた。けれど、どちらもルール違反だった。ひとりはArtistas callejerosのメンバーで、もう一人は他ならぬ自分が償うことのできない傷を負わせた相手だった。離れることなど考えられなかった。けれどこれ以上近づくこともできなかった。

ディーニュ・レ・バン、別れ

おもちゃのように小さな電車だった。ヴィルが子供の頃に憧れた、どこか知らない彼方へと連れて行ってくれる魔法の乗り物にしては、あまりに頼りなかった。父親と母親の呪縛を振り切ってから、いくらでもした電車の旅。ここではないどこかに行く事だけが心躍る歓びだった。あの頃は自由である事だけがヴィルの望むすべてだった。この街でヴィルがしようとしている事は、しかし、心躍る事でも望んでいる事でもなかった。

小さな頼りない車体を眺めて、ヴィルは自分をあざ笑った。ここでないどこか。そんな所はどこにもない。チケットを買えば電車には乗れる。ただ、それだけのことだ。

ニースから三時間以上、のんびりと走るローカル列車プロヴァンス鉄道の終点が、ローマ時代から続く温泉の街、ディーニュ・レ・バンだった。旧市街の中心にあるサン・ジェローム大聖堂は街と同じ赤みかがった石材で出来ている。鐘楼がプロヴァンスに特有の繊細な鉄細工で、遠くから見てもひときわ目立つ。曲がりくねった小さな道が商店街に続く、この大聖堂の前で四人はいつものように稼いだ。

秋がはじまりまだ暖かくても日差しが弱くなっている。オリーブの葉は灰色がかった深緑に変わり、黄色く乾いた枯れ葉も時折強く吹く風に乗ってあたりに乾いた音を響かせた。

食事の度におかれる透明なパスティス入りのグラス、カラフェから水を注ぐと途端に白く変わる魔法も、既に日常と化していた。アニス

の香りも、夏のプロヴァンスのなくてはならない残り香だった。季節はゆっくりと変わっていく。
　稔が一人でバーに入ってゆき、パスティスを頼むと、カウンターの親父は小さいグラスをすっと差し出した。その後、レネが入ってきて、プロヴァンス方言で早口にパスティスを頼むと、もう少し大きいグラスに倍くらいの量が入って出てきた。
「なんで、こんなに違うんだよ」
納得のいかない稔がレネに訊くと、はじめてバーの親父は稔とレネが仲間だと氣づき、あわててレネに早口で弁解をした。レネは大笑いした。
「それ、外国人旅行者バージョンなんだそうです、今、僕と同じなのを用意してくれるそうです。今飲んでる分は、お詫びにサービスにしてくれますって、よかったですね」
　蝶子とヴィルが続いて後ろから入ってきて、その話を聞きつけた。蝶子が高笑いした。
「これで、ヤスもテデスコのお仲間じゃない」
ミラノで出会った日に市場でヴィルがぼったくられていた時の話をしているのだ。稔はふくれた。レネも楽しそうに笑った。けれどヴィルは何も言わなかった。楽しそうにもしなかったし、腹を立てているようでもなかった。稔は「おや」と思った。ドイツ人の心はどこかここでない所を泳いでいるようだった。
　それから二日ほどして、再び稔はヴィルの様子に目を留めた。今度は仕事中だった。稔と蝶子が『日本メドレー』を演奏し終え、続いて蝶子がレネのリング演技の伴奏をはじめた時だった。水を飲みながらふと横目で見ると、ヴィルが目を閉じていた。蝶子のフルートに意識を集中しているようだった。それだけなら何とも思わなかっただろう。だが、その後ヴィルは目を開けて空を見上げた。そして、ずっと何かを考え込んでいた。仕事中にヴィルがそんなに長く上の空になった事はなかったので、いったいどうしたのだろうと稔は訝った。
　ヴィルは実行しようと考えていた。愛する女がおそらく望んでいる事を。それ以外、解釈のしようがなかった。浅草で心が通じたという確信を頼みに、彼女の行動を自分に都合良く解釈してみても、すぐに現実的な考えが彼の期待を打ち消した。あの時と違う。彼女はもうすべて知っているのだ。自分が誰であるかも、一年以上も信頼を裏切っていた事実も。バレンシアの月夜に、声を荒げる事すらせずに問いただした蝶子の冷たい表情。持て余している想いをどうする事も出来ない自分を責めるように繰り返される奇妙な挑発。彼女はもはや元の信頼のおける仲間に戻れない自分を、曖昧なまま側に置いておきたくないのだ。けれど、彼女はArtistas callejerosを尊重するが故に、こちらの自発的な決断を待っている。
　ヴィルは空を見上げて思った。どこに行くのでも構わない。ただ、Artistas callejerosの仲間たちと、ずっと旅を続けたかった。蝶子のフルートの音色と絡み合う音の世界を泳ぎ続けたかった。食べるのも、飲むのも、歩くのも、一人では味氣ない事だろう。
　一週間ほどのディーニュ滞在の後、ニースに戻る事になった。チケットを買おうとしていると、不意にヴィルが言った。

「俺はもう少しここにいる」
　三人は黙って、ドイツ人を見た。ヴィルはいつも通り無表情だった。だが稔はすぐに理解した。ヴィルにはもう限界だったのだ。正体を曝し、心も知れ渡っている。だが、彼には何も変えられない。日に日にひどくなる蝶子の挑発に堪え、このままArtistas callejerosに加わっているのは彼には残酷すぎる選択だった。
「でも、後から来るわよね」
蝶子は声を震わせた。
「俺の事は待たなくていい」
それは蝶子に対する決別の宣言だった。さすがナチスとＳＳを生んだ民族だ。こんな切ない話なのに、眉一つ動かしやしねえ。稔は感心した。ほらみろ、お蝶。お前はいじめすぎて猫を殺してしまったんだ。愚かな女め。

　翌日、三人はニース行きの電車に乗り込んでいた。重苦しい空氣が漂い、ほとんど誰も口を利かなかった。蝶子はことさら無表情だった。お、トカゲ女がテデスコ化してきたぞ。稔は腹の中でつぶやいた。車窓から何度もプラットフォームを覗いていたレネが叫んだ。
「あ、テデスコ！」
稔と蝶子も窓から身を乗り出した。
「おい、乗れ！」
稔が叫んだ。だがヴィルは首を振った。見送りにきた、それだけのようだった。最後に一目だけ蝶子を見たかったに違いない。蝶子はそわそわとしていたが、ついに言った。
「私、降りる」
「えっ」
稔とレネが同時に絶句した。蝶子はハンドバックだけをつかむと、乗り込んでくる乗客をかきわけて必死で出口に向かった。
「おいっ。もう時間がないぞ！」
稔が叫んだが蝶子は降りる事しか考えていなかった。蝶子がプラットフォームに降りると同時に、ドアが閉まり施錠の音がした。ヴィルはさすがに驚いてこちらに走ってくる。稔は窓から蝶子に叫んだ。
「おい、お蝶、ニースで待っているからな！」
「ええ、待っていて。きっと二人で行くから！」
　電車は動き出した。ヴィルは蝶子の傍らに立った。そのヴィルを鬼のごとく睨みつけると騒音に負けないように蝶子は叫んだ。
「本氣の恋なんてまっぴらよ。それなのに、なんでよりにもよってあんたなのよ！」
　ヴィルは起こった奇跡を信じられないまま、列車が完全に過ぎ去るまで蝶子の泣きそうな美しい顔を見つめていた。それから、風に踊る蝶子の髪と頬の間にそっと手のひらを滑り込ませ、感無量の声にはまったくそぐわない、いつもの無表情で答えた。
「それはこっちの台詞だ」
　遠く車窓から覗く稔とレネには、二人が抱き合っている姿が小さく見えた。稔は顔をゆがめて窓の外を見ているレネの肩をポンと叩いて言った。
「泣くな、ブラン・ベック。今夜は俺がとことんつきあってやるからさ」

ニース、再会

二人は二日後にやってきた。あまりいい立地とは言えなかったが、見つけやすいという理由で選んだ駅前の広場で稔とレネがのんびりと稼いでいると、列車から降りた観光客に混じって、二人は普通に歩いてきた。

「ハロー」

蝶子はこともなげに言った。まるで、ちょっと水を買いにいって戻ってきたかのような簡単さで。ヴィルも特に何も言わなかったし、稔もレネも大げさには喜ばなかった。もちろん稔の演奏は突如として元氣いっぱいになったし、レネは眼鏡をとって目をこすっていたのだが。

蝶子とヴィルは、以前とほとんど変わらないように見えた。少なくともようやく想いの通じた恋人たちのようには全く見えなかった。

いつも一緒にいる稔とレネにだけは感じられるわずかな変化もあった。たとえば、お互いにあだ名では呼ばなくなった。イタリアや日本にいた頃のような激しい舌戦も帰ってきた。蝶子は『外泊』を再開した。しかし、この『外泊』には稔もレネも反対しなかった。何も言わないが、もちろんヴィルもその晩はいなくなるのだ。

二人が戻ってきて三日ほどは氣がつかなかったが、二人の薬指にはシンプルな銀の指輪が光っていた。ニースではいつも稔とレネの側にいるのだから、もちろんディーニュで買ったのだろう。

蝶子はヴィルに対して不要な挑発をしなくなり、ヴィルが蝶子を苦しげに見つめることもなくなった。稔とレネは、憑き物が落ちたかのように心が軽くなった。どれほど二人の間の緊張が強まっていたのか、稔もレネも氣がついていなかったのだ。

数日して、仕事だと言ってまたやってきたカルロスにもそれは簡単にわかったらしい。

「あれ。あの二人、うまくいったんですか？」

こっそりとカルロスが稔に訊いた。

「げ、ギョロ目、なんでわかるんだよ」

「そりゃ、わかりますよ。前回、バレンシアで会った時は、いやあ、息苦しかった。マタドールと雄牛の死闘みたいでしたからね」

稔はそのたとえに大笑いした。それから、そういえばという風に付け加えた。

「あんたには氣の毒だけどな」

「私はそんなに心狭くありませんよ。いいレストラン、知っているんです。一緒に乾杯しましょう」

サレヤ広場には毎日市場が立つ。月曜日は骨董市で、それ以外の曜日には花や野菜のマーケットだ。もともと観光客であふれかえっているニースの中でも、格別に人通りが多い。秋の柔らかい陽光の下、四人は楽しく稼いだ。

蝶子は幸福をかみしめていた。何も失われなかった。Artistas callejeros は、前と同じに存在し続けた。稔もレネもヴィルも、前と同じように側にいた。それだけではない、これからは優しい青い目をした恋人がいつも側にいてくれるのだ。

ニースに戻るまでの三時間半、ディーゼルで走る小さなプロヴァンス鉄道の車体が、右に左にと揺れる中、蝶子はヴィルにもたれかかって窓の外を眺めていた。往きは四人で不必要にしゃべりながら来た風景を、逆方向に二人で戻りながらほとんど口も利かずに人生の不思議について考えていた。赤や紫のえも言われぬ色の地層、飛び交う猛禽、蜂蜜色の壁の小さな家、川にかかる石橋、空に広がる天使の羽のような雲。蝶子はその雲を指差して、ヴィルに話しかけようとした。ヴィルは目を閉じて眠っていた。蝶子はヴィルが眠れた事を嬉しく思って微笑み、伸ばした自分の手に光る指輪に目を留めた。

ディーニュの街を二人で歩いている時に、蝶子は宝石店のウィンドウの前で立ち止まった。目を惹いたのは大きなサファイアがついたネックレスだった。それは、エッシェンドルフ教授がかつて婚約のしるしとしてプレゼントするつもりだったネックレスに酷似していた。けれど、それを受け取る前に蝶子は逃げ出したのだ。ヴィルがその事を知っているはずはなかった。ヴィルは宝石にはほとんど興味がなかった。

「欲しいのか？」

ヴィルは困ったように蝶子に言った。贈りたくても、そのサファイアは大道芸人が買えるような値段ではなかった。蝶子は微笑んだ。

「いいえ。欲しいものはこれじゃないわ」

そういうと、ヴィルの手を取って、一緒に宝石店に入っていき、一緒に嵌める事のできるこの銀のペアリングをお互いにプレゼントしたのだ。約束の徴に。

その朝、蝶子が目を醒ますと、隣には誰もいなかった。蝶子はすっかりうろたえて叫び声をあげた。その声を聞きつけて、洗面所のドアが開き、シェービングクリームが半分残ったままでヴィルが顔を出した。蝶子は勘違いで動揺したことを恥じて窓の方を向いて黙り込んだ。タオルでクリームを拭きながら、ヴィルがベッドに戻ってきた。顔を見られないように蝶子はシーツを被った。

「蝶子」

「何よ。髭、剃り終えていないんでしょ。続けなさいよ」

ヴィルはシーツを剥いだ。

「やめてよ」

蝶子は半泣きだった。ヴィルはその頬に優しく触れながら謝った。

「悪かった。俺はまたあんたの信頼を失う事をしたんだな。俺は、あんたが側にいてほしいと思っているなんて夢にも思っていなかった」

「平氣よ。ずっと独りだったもの。フルートさえ吹ければ、それでよかったのよ」

「俺もそうだった。自由にさえなれれば、それだけでよかった。自分が孤独である事すら知らなかった」

「行きたければ、行ってもいいのよ。私たちには、あなたを縛り付けることはできないもの」

蝶子は顔を見られないようにシーツを被って身をよじった。ヴィルはシーツの上から素直でない蝶子を抱きしめて言った。

「ニースだろうが、どこだろうが、あんたの行く所に一緒に行く。これから、ずっと一緒にいて、あんたの信頼を取り戻すよう努力する。約束する」

蝶子は、それで泣き出したのだ。二人で買った指輪は、その約束の徴

だった。

アヴィニヨン、乾杯

レネがおずおずとする時は、何か頼み事があることだとよくわかっているので、稔は発言を促した。
「それで？なんか話があるんだろ？」
レネは言いにくそうに下を向いた。
「母さんの声が聞きたくて、電話しちゃったんです」
蝶子が笑った。
「別にいいじゃない。どんどん電話すれば」
「はあ。それが、電話に出たのは父さんで」
「ピエールは元氣だったか？」
ヴィルが優しく訊いた。
「それが、腰を痛めたんだそうです。今は家中すごく忙しいので、休んでいる場合じゃないっていうんです。それで、僕、つい、帰って手伝うって言っちゃったんです」
ひどく後悔している様子だった。
「なんで、それがダメなんだよ。もちろん行って手伝うべきじゃないか」
稔が力強く言った。
「でも、みんなにどこかで待っていてもらわなくちゃいけないし……」
「なんで、どこかで待っていなきゃいけないのよ」
蝶子がウィンクした。ヴィルも続けた。
「全員で行って手伝えばいいだろう」
「決定だな。今夜、これから行くって、もう一度電話してこい」

稔が笑いながらレネに言った。レネは泣き笑いの変な表情のまま、電話に走った。三人は素早く荷物をまとめ始めた。

「すみませんねぇ。みなさんに手伝いに来させちゃって」

ピエールは難儀そうに椅子から立ち上がろうとしたので、蝶子があわてて止めた。

「また、お邪魔しますね。私たち、どんなことでもしますから、どんどん言いつけてくださいね」

「ブドウ畑、誰もいなかったみたいだけど……」

稔が首を傾げた。それを聞いてレネとピエールが二人で吹き出した。

「ブドウの収穫はとっくに終わったよ。今やっているのは醸造だ」

「もうじき二次発酵が終わるので、瓶詰めとかラベル張りなどの手作業が待っているんですよ」

　それを聞いて三人は若干嬉しそうな顔になった。瓶に詰めるってことは、ワインは出来上がったってことじゃないか。去年の十二月に飲んで以来、ここのワインをたっぷり飲める日をどれほど待っていたことか……。

「飲むのは構いませんが、作業中のワインを全部飲まないように注意してくださいよ。うちのブドウのだけでなく、他の農家に頼まれたものもありますんでね」

ピエールが笑った。

「どの農家も自分のところで醸造しているんじゃないの？」

「いえ、ブドウだけを栽培している農家の方が多いんですよ。で、うちで預かるのは、近所でも有機農法のブドウを栽培しているところのだけなんです。そうしないといくらうちが有機農法で作っていても樽に化学肥料の残りが混ざってしまったりしますからね」

　そういって、ピエールは妻のシュザンヌに合図をした。わかっていますよ、というようにシュザンヌはグラスとデキャンタに入ったワインを持ってきた。

「どうして、いつもデキャンタに移し替えるの？私たちがすぐ飲んじゃうのに」

蝶子は前から疑問に思っていたことをぶつけてみた。空氣に触れさせるという意味ならしばらく前からコルクをあけるだけじゃダメなのかしら。

「うちのワインには酸化防止剤を加えないので、酸化防止のために瓶詰めの時に少し炭酸ガスを入れるんです。だから飲む前には空氣に広く触れさせてガスを抜くんですよ」

レネが説明した。

「それもほとんど必要ないようになってきたけれどね」

　ピエールが説明した。以前は多くの農家が収穫量の増加ばかりに苦心してきたため、ブドウ自体が健康でなくブドウが元から含む自然の二酸化硫黄だけでは酸化や腐敗を止められなかった。けれど農薬の使用をやめ、収穫量が減るのを覚悟で健康なブドウ作りをし、土地に伝わる天然酵母だけで作るようにしてきたおかげで、土地のテロワールを持つ健康なワインが出来るようになってきたのである。

「周りの農家たちに賛同してもらうのにもずいぶん時間がかかったが、最近のうちのワインを飲むとじいさんが作っていたワインを思い出すなんていってくれる人たちも増えてね」

「昔はみんなこうやって作っていたんですものねぇ」
　シュザンヌは笑って言ったが、きっとそういう選択をした夫の信念に協力していくのは簡単なことではなかったに違いない。収穫・生産量が落ち、味が以前とは違うとクレームをもらい、それでも信念に従ってワインを作ってきた両親のことをレネは誇りに思ってた。
「泊まる部屋は、この間と同じ準備をすればいいわよね」
そうシュザンヌが言った。レネは首を振ってフランス語で母親に言った。
「ヤスはマリのいた部屋で、僕はもとの部屋にする。で、そっちの二人を客間に泊めればいいから」
それを聞いてピエールがにやりと笑った。
「ほう。そうなんですか」
　それで三人にもレネたちの会話の主旨がわかった。稔はつられてニヤニヤと笑い、蝶子はただにっこりと笑った。ヴィルは何の表情もみせなかった。シュザンヌは頷いて、部屋の準備をしに階段を上がっていった。
「それで、日本はどうだったんだ？」
ピエールはレネに訊いた。
「最高だったよ。自然がすばらしくて、風景がエキゾチックだったのはもちろんだけれど、人々がみんな親切で魅力的でね。いつかまた行きたいなあ」
「久しぶりの故郷だったんでしょう、満喫できましたか」
稔はピエールの言葉に力強く頷いた。
「おかげさまで。本当は、俺のために無理して三人がついてきてくれたんですが、テデスコやブラン・ベックも氣に入ってくれたみたいなんで、ほっとしましたよ」
「チョウコさんも」
「そうですね。普段は帰らなくてもいいと思っていても、帰るとそれなりに感慨がありますわ。やっぱり祖国ですもの。それに、私の知らなかった日本もずいぶん発見したんですよ。彼らと一緒にいなかったらきっと生涯経験しなかったでしょうね」
「そうそう。前に話をしたマドモワゼル・真耶にもついに会ったんだよ。本当にきれいな人だったな」
「なんだ、レネ。お前、日本に行ってまで女性にぽーっとなっていたのか」
「僕だけじゃないよ、父さん。ヤスだって……」
「ほう。それでうまくいったんですか？」
ピエールが突っ込むと稔は笑って否定した。
「論外ですよ。すごくかわいい女性だったんですが、人妻でしたから」
「僕も望みなしだったよ、父さん。真耶にはすごくかっこいい音楽のパートナーがいてさ。他の男なんかには目もくれないって感じだったもの」
ピエールは大笑いした。
「まあ、この場合だけは、うまくいかないほうがいいよ。お前に日本人と結婚して日本に移住すると言い出されてもこまるしな」
　翌日から四人は作業に参加した。やる事は単純だったので、慣れる

とおしゃべりしながらの作業も可能だった。レネが樽から瓶にワインを注ぐ。稔がそれを受け取って炭酸ガスを注入する。コルクをしっかりと閉めるのはヴィルで、それを受け取った蝶子がラベルを貼って行く。出来上がった瓶がある程度たまると、男三人で運び出し、蝶子は備品をきちんと揃えたり、掃除をした。
「収穫の時は、村中総出でやるし、手伝いも結構くるんだが、この時期は毎年厳しいんだよなあ。」
ピエールはぼそっと言った。
「毎年手伝いにきていた、ニコラはどうしたの？」
レネが訊いた。
「あいつは、結婚してリヨンに引っ越したんだ。来年からどうしようかなあ」
「どうせ、十一月には毎年コモにいくんだ。その前にアヴィニヨンに立ち寄るってのも悪くないよな？」
稔が言った。レネは、嬉しそうに稔をみた。
「そうよね。私たちでよかったら、手伝いにきますわ」
蝶子の言葉に、ピエールは嬉しそうに頷いた。

定休日にヴィルと蝶子はボーランの『フルートとジャズ・ピアノ・トリオのための組曲』の『Sentimentale』を合わせていた。稔とレネは、出来たばかりの赤ワインを飲みながら聴いていた。
「マリがコルシカに引っ越すまでは、よく僕の歌の伴奏をこのピアノでしてくれたんだけど。それ以来、だれもこのピアノを弾いていなかったんですよね。調律、ずっとしていないみたいだけど…」
「あんまりしていないみたいだな。我慢できる限界ってとこかな」
おや。珍しくお蝶が赤い顔をしているぞ。稔は思った。蝶子は苦しそうにフルートを吹いた事はほとんどなかったのだ。間奏のところまで来ると、蝶子はフルートを離して文句を言った。
「ちょっと。なんでそんなにゆっくり弾くのよ」
ヴィルは黙って楽譜のテンポを示した。
「だけど、メロディのところを前奏よりも、そこまでテンポを落とす事ないでしょう」
「苦しそうだな。決められたテンポじゃ吹けないのか」
そのヴィルの言葉に、怒りでさらに赤くなった蝶子はフルートをぐっと差し出した。
「じゃあ、あなたが吹いてみなさいよっ」
ヴィルは、きょとんとして、フルートを受け取った。蝶子はさっさとピアノの椅子に陣取って、伴奏をヴィルと同じようなテンポで弾き出した。稔とレネは、へえ、という顔をして成り行きを見守った。
ヴィルはゆったりとフルートを構えて、同じメロディを吹き出した。蝶子は容赦せずに伴奏したが、ヴィルはそのゆっくりとした伴奏でも途切れずに、切々とメロディを奏でていった。蝶子のはキレのある華やかな音色だったが、ヴィルのは穏やかで暖かかった。優しくて心地よいテンポだった。その音色を聴いているうちに、また蝶子の顔が紅潮してきた。ヴィルはちっとも苦しそうには見えなかった。蝶子は先程と同じところで伴奏を止めた。稔が宣言した。
「テデスコの勝ち」
フルートを黙って見ているヴィルから楽器を奪い取って蝶子が叫

んだ。
「わかっているわよ！」
「どこに行くんですか？」
レネが出て行こうとする蝶子に声をかけた。
「あっちで一人で練習してくるの！」
　負けず嫌いなヤツだな。稔はニヤニヤと笑った。だがヴィルはぼそっと言った。
「その必要はない。俺が悪かった」
「同情してくれなくても結構よ」
「同情して言っているんじゃない。このテンポは本当にきつい」
「楽々と吹いていたじゃないか」
稔が言った。ヴィルは首を振った。
「長さは吹けても、蝶子みたいに繊細な表現は出来ていない。このテンポでは、吹くだけで精一杯だ。俺が悪かった。少しテンポを速くするよ」
レネと稔は顔を見合わせた。蝶子は戻ってきて言った。
「あなたのテンポの方がいいのよ。私、練習して同じテンポで出来るようにする。最初は無理だと思うけれど、助けてよ」
「わかった。じゃあ、少しずつ長くしていこう」
　夕方に、ある程度形にした二人の演奏を聴いたピエールとシュザンヌは、なんてロマンティックで美しい調べなんだろうと、感動した。
「さすが愛し合っている二人の演奏は違うわね」
母親にそういわれたレネは、昼間のやり取りを思い出して、なんと返事をしていいのかわからなかった。
「げっ。弦が切れちまった！」
稔が叫んだ。蝶子が振り向くと三味線を抱えて珍しくうろたえている稔がいた。
「あら。替えの弦、ないの？」
「使い切っちまったんだ。前もこの弦だけ切れちまったから。くそっ。なんで日本に行った時に買っておかなかったんだろう。すっかり忘れていた」
「インターネットで注文できないの？」
「ギターの弦なら間違いなくできるけど、三味線はなあ。それに、この弦は特殊なんだ」
「前はどこで注文していたの？」
「……。お袋のところにいくらでもストックがあったから、自分で注文した事、ないや」
蝶子は頭を抱えた。
「お母さんに、連絡して届けてもらいなさいよ。どうせこの間、涙の再会したんだし、いまさら隠れていなくてもいいんでしょ」
蝶子が言うと、稔は肩をすくめた。
「そういや、そうだな。でも、届くまで三味線弾けないぞ。それに、弦はどこに届けてもらえばいいんだよ」
　レネとヴィルが荷物をまとめて居間に入ってきたので、蝶子は英語に切り替えた。
「ここに、届けてもらいなさいよ。どうせ、これから行くコモではギターしか弾かないんだし、コモの後は、バロセロナのクリスマスパー

ティの前に、またここに戻ってきてブラン・ベックの誕生日を祝えばいいじゃない。それまで弾けないなら三味線も置いていけば」
　レネが歓びの叫びをあげながら、母親に誕生日にまた去勢鶏をはじめとするご馳走を用意しておくようにと頼みにいった。
「そうだな。そうするか」
稔は、三味線を袋にしまうと名残惜しそうに居間のピアノの陰に立てかけた。シャルル・ド・ゴール空港で逃げ出す事を決めたあの日から、これだけは絶対に手放さなかった楽器だった。手放すのは心もとなかった。でも、ここなら安心だから、稔は自分に言い聞かせた。
　四人の何かと増えた持ち物はコルタドの館に、またはこのレネの両親の家にと少しずつ増えている。それはヨーロッパという場所に少しずつおろし始めている彼らの根のようなものだった。
「じゃあ、一ヶ月後に」
四人は交互にピエールとシュザンヌとキスを交わし、幾度も振り向き、手を降りながら丘を降りていった。コモではロッコ氏がまた大げさに出迎えてくれる事だろう。
「あのテラスで、また大貧民しましょう」
レネが嬉しそうに言った。
「おう。今度は、お前ばかり大富豪にさせないからな」
稔も笑った。
　蝶子は電車に乗り込むと、さっそくモロッコで買ったティーグラスを四つ取り出した。ヴィルがピエールに餞別としてもらったヌーボーワインを鞄から出して栓を抜き、それぞれのグラスに注いだ。電車はゆっくりと動き出した。

（初出　二〇一一年九月　書き下ろし）